

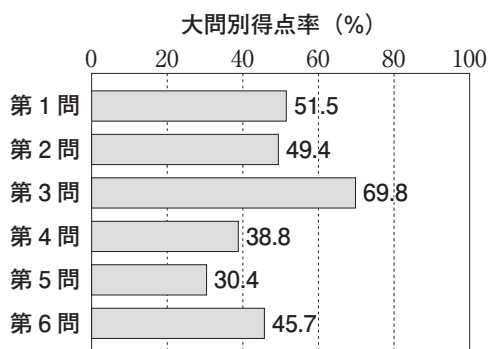
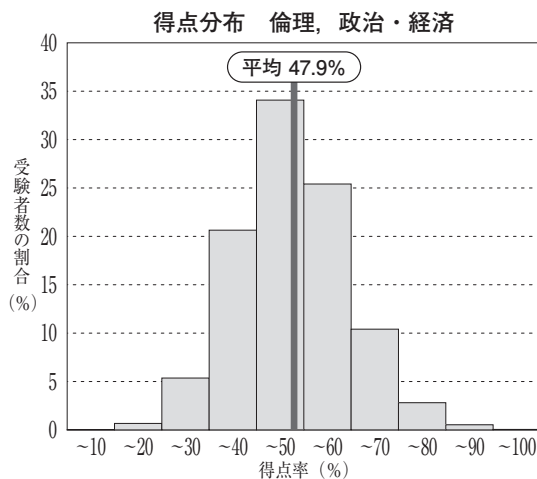
倫理, 政治・経済

未習分野について何も知らないという状態から、早く抜け出そう。

I. 全体講評

今回の「第3回8月センター試験本番レベル模試 倫理, 政治・経済」の平均点は、47.9点であった。まだ平年の本番平均点には遠く及ばないものの、順調に上昇してきたと見ることはできる。

今回の最大の特徴は、**政治・経済分野**（第4問～第6問）のほうが出来ていなかったことである。**倫理分野**は資料文読解問題や本文の趣旨読解問題が出題されることから、未習者でも正答できるチャンスが比較的大きいが、政治・経済分野にはそうした設問が少ない。しかも**国際政治**および**国際経済**という、終盤に学ぶテーマが比較的多かったことも響いた。早めに全分野に目を通しておくようにしたい。



II. 大問別分析

第1問 青年期分野・現代社会分野

読解問題などを中心に、まずまずの得点率だった。

大問の得点率は51.5%と、まずまずであった。多くの受験者が正答できた平易な文章読解問題が含まれていたことが大きかった。**生命倫理**についての問3 [3]は正答率74.9%とよくできていたが、未習者が多い**現代思想**についての問5 [5]は正答率27.0%と予想通り低調だった。

第2問 源流思想・日本思想分野

未習者の多い日本思想分野は芳しくなかった。

大問の得点率は49.4%と、振るわなかった。源流思想分野は比較的上出来だが、**日本思想**分野は未習者が多いのか低調であり、特に**近世思想**についての語句組合せ問題である問4 [9]は、正答率はわずか13.8%であった。解答が大きく分散しているので、手がかりもなかったという受験者が多かったことが分かる。正答率が8割を超えた趣旨読解問題の問7 [12]がなければ、もっと悪い結果になっていたことだろう。

第3問 源流思想・西洋近現代思想分野

読解問題で確実に得点できたことから好結果となった。

大問の得点率は69.8%と、非常に高かった。既習者が多い**源流思想**分野が基礎事項中心であったことと、未習者の多い**西洋近現代思想**で資料文読解問題が出題されたことが大きかった。その中で、問4 [16]は正答率41.8%と、大問中で最も低かった。ベンサムとミルの功利主義の違い、道徳における動機主義と結果主義との違いなどは、近年注目されている分野である。改めて確認しておこう。本文趣旨読解問題も堅調であった。

第4問 貿易

未習者の多い国際経済分野の出来が悪かった。

大問としての得点率は38.8%と、低かった。比較生産費説についての問1 [19]は正答率69.5%であったが、それ以外は軒並み低く、特に問7 [25]の正答率は18.6%、③の選択率が50.6%であった。WTOのネガティブ・コンセンサス方式はGATTとの相違点として頻出である。国際経済分野の未習者が点を取れないのは仕方ないが、早めに学んでおかないと定着させられずに終わるおそれもあるので、その点は留意してほしい。

第5問 国際社会と日本

既習分野中心のはずだが、出来は極めて悪かった。

大問としての得点率は30.4%と、極めて低かった。正答率が60%を超えた設問は1問もなく、PKOについての問4 [30]は正答率が8.5%であった。①の選択率が47.4%であるが、自衛隊のペルシャ湾派遣がPKO協力の制定前であることは理解しておかなくてはならない。また、問1 [27]の自衛隊の海外派遣は正答率21.3%。①の選択率が60.6%に上った。2001年のテロ対策特措法がアフガニスタン侵攻を支援するものであったことが理解できていなかった。大問のテーマである平和主義はほとんどの受験生が既習であったはずなので、理解の足りなかった箇所をよく確認してもらいたい。

第6問 地方自治

政治・経済分野では最も上出来だったが、得点率は50%にも届かなかった。

大問としての得点率は政治・経済分野で最も高かったが、それでも45.7%にとどまった。最も正答率が低かったのは地方における住民投票についての問3 [34]の26.7%である。繰り返し問われてきた基礎事項がポイントになっているのだが、①と③の選択率が正答率よりも高く、定着していない受験者が多くを占めていた。特に条例による住民投票に法的拘束力がないというのは重要事項であるのに、30.0%の受験者がこれを選択していたのは残念な結果である。

Ⅲ. 学習アドバイス

◆初学者や選択科目変更者は、決して「倫理, 政治・経済」を甘く見ないこと。

公民科目は夏から白紙の状態での学習を開始する受験生が多い。またこの時期には、選択科目を変更する受験生も少なくない。今回初めて「倫理, 政治・経済」で模試を受けたという受験生もいたことだろう。もちろん科目変更で成功する受験生はいる。しかし単に「日本史が伸び悩んでいるので」とか「世界史は暗記しきれないので」といった消極的理由で科目を変更する受験生は、痛い目に遭うことが多い。厳しいことを言うようだが、大半の受験生は、当初の見込みよりも結果的に低い点数しか取れない。この時期に科目を変更するという事は、そもそも見通しが甘かったわけであり、同じように「倫理, 政治・経済」という科目を甘くみるならば、残念な結果に終わってしまうことだろう。

確かに公民科目は、世界史Bや日本史Bと比べると分量は少ない。しかし「倫理, 政治・経済」では、「倫理」と「政治・経済」という社会科2科目分を学習しなければならないし、高校で十分な受験対策が行われるケースは極めて少ない。だから、ほとんどの受験生が考えるよりも大変な科目なのである。希望的観測に基づいて甘い期待を抱かないほうがいい。

根拠のない楽観が冬場あたりに絶望に変わるというのは、受験界の恒例行事だ。くれぐれもしっかり対策を立ててほしい。

◆次回の模試に向けて。

ではどうすればいいのだろうか。初学者は、まず今年のセンター試験の問題をすぐに聞いてみよう。そして今回の模試の結果と合わせて、いまの自分がどれくらいの実力なのかを直視しよう。あるいはどのくらい実力がないのかをよく認識しよう。そうして自分の何が不足しているのか、課題を見つけてみよう。

自分の実力のなさを知るのは愉快なことではないが、「無知の知」から始めなければならない。根拠のない楽観論と悲観論を退け、現実を直視することから、受験勉強は始まる。